本校の研究について

新学習指導要領が平成２９年３月に告示され、各教科等における見方・考え方を働かせ、各教科等の活動を通して資質・能力を育成することが盛り込まれた。これからの時代は、教科等で学んだことを生かし、自ら自分の身の回りの課題をはじめとする社会における課題を解決するための力が必要となってくる。それには、教科だけではなく「なすことによって学ぶ」特別活動の資質・能力を身に付けていくことが大事だと考え、この２年間研究を進めてきた。

本校の児童の実態として、児童に実施した実態調査から、主に次の３つの課題が見えてきた。第１に、友達のよさを認めたり、友達の意見を大切にしたりすることはできるが、自己肯定感が低いという点である。つまり、友達のよさには気付いているが、自分のよさに気付いていない児童が多い。第２に、学級活動や日常の生活において自主性が乏しいという点である。与えられた課題に対しては、しっかり取り組むことができるが、自ら課題を見つけ主体的に取り組むことが苦手である。第３に、学級活動（２）日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全における課題について、児童と教員の感覚に差がある点である。児童は日常の生活における自らの課題を意識しておらず、学級活動（２）の題材において、児童に自分や学級全員の行動を客観的に捉えさせ、課題を明確にさせる必要があることが分かってきた。

また、平成２４・２５年の小学校学習指導要領実施状況調査では、特別活動に関する質問紙調査に肯定的な回答をしている児童が多い学級ほど、学力調査において平均正答率が高い傾向が見られた。その結果から、学級活動の充実と学力向上には密接な関係があることが報告されている。

以上のことから、学級活動において、児童の自発的・自治的な活動を充実させることで、様々な集団での関わりの中で合意形成を図ったり、協働したりすることができるのではないか、また、それらの活動の中で、児童が、自分を肯定的に捉え、誰かの役に立ち、誰かに必要とされていることを実感することで、児童の自己肯定感や自己有用感を高めることができるのではないかと考えた。これらの活動を続けることにより、「自分もまわりも大切にできる」居心地のよい集団（学級・学校）づくりを進めることができ、児童が、よりよい人間関係を築いていけるのではないかと考え、本研究主題を設定し、研究に取り組んできた。